

宮田守男 「現場」からの風

が笑顔で「おはよう」の呼びかけに、元気な声で「おはようございます」の返事。新一年生と思われる初々しい児童や、3月まで小学生だった児童が、中学の制服に、児童たちを地域で守っていかなくては、との思いが強くなる。しかし年々通学児童の数は少なくなっている状況に、寂しさを感ずってしまうのは、私だけだろうか。

口減。総人口が前年同期で減るのは、2002年から13年連続。死亡が出生を上回る「自然減」は11年連続の8713人で04年に自然減に転じている。減少率は最も大きい。転出が転入を上回る「社会減」も14年連続の1980人だった。増えたのは、大北管内では17人増の白馬村だけ。しかし昨年発生した神

後の見直しは暗い。信濃毎日新聞の地方自治に関する県内有権者の意識を察する世論調査でも「将来削減する可能性が7割」とした日本創生会議の試算が示された。県内34市町村のうち市町村消滅の危機感を持つ市町村は62.7%だと報道された。逆に喜ぶのは、約4割の市町村はこんな考えを持っているか心配になる。

自治体存続には、人口増加対策が必要だと、4月に実施された統一地方選挙の各立候補者の懸命な訴えに、有権者の反応は芳しくない。しかし全国では、既に積極的な取り組みがなされているとの報道も多いことも事実だ。避けられない人口減少社会、大北地域がどうあるべきか問われている。

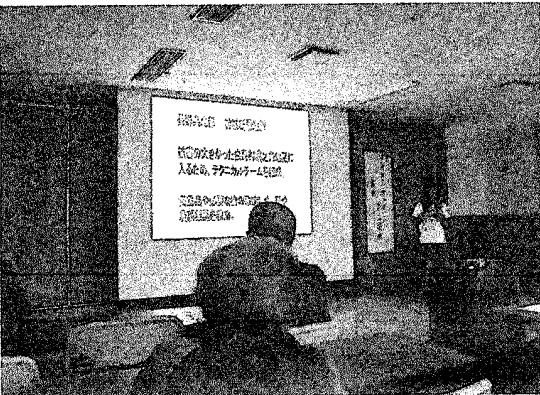
新年度を迎えた時ほど、今私達を取り巻く課題について真剣に考えてみませんか

新年度を迎えた。春の全国交通安全運動の実施に伴って、白馬村交通安全協会の役員として児童の通学時間に当たる朝7時から松川橋北の信号機で街頭指導に当たる。こちらから児童の目を見つめな

4月初旬、白馬村災害ボランティアチームセンターが主催した報告会に参加する。神城断層地震のボランティア活動の実情を知りたかったからだ。白馬村保健福祉ふれあいセンター会議室には大勢の参加者。これまでボランティア活動を企画した関係者を対象に告知したようだが、参加者からは、もっと大勢の村民に声を届けるべきだとの発言も。これまで経験したことがない多数の被災住宅の撤去には、大きな村民パワーが必要と考える参加者には、会場に顔を寄せない被災地行政関係者の消極的な対応に、憤りを感じてしまっ

は、至極普通の感情だろう。山岸俊幸事務局長よりの対応の概略が説明されるが、改めて災害の大きさに心が締め付けられる。講座では「東日本大震災と広馬土砂災害から学ぶ白馬の災害支援活動」と題してNPO法人「MARK THE HEAVEN め組JAPAN」のメンバー橋之口みきさんからも多くの映像や課題と問題点が報告される。今回の災害の第一線に対処していた橋之口さんの事、め組ジャンの活動を初めて知った白馬村に住む私。災害時、白馬村内

ティアクルコーデイネーターの橋之口さん、講義でも参加者のボランティアの適正を視野に組み立てられた講義内容だ



ティアクルコーデイネーターの橋之口さん、講義でも参加者のボランティアの適正を視野に組み立てられた講義内容だ

は、至極普通の感情だろう。山岸俊幸事務局長よりの対応の概略が説明されるが、改めて災害の大きさに心が締め付けられる。講座では「東日本大震災と広馬土砂災害から学ぶ白馬の災害支援活動」と題してNPO法人「MARK THE HEAVEN め組JAPAN」のメンバー橋之口みきさんからも多くの映像や課題と問題点が報告される。今回の災害の第一線に対処していた橋之口さんの事、め組ジャンの活動を初めて知った白馬村に住む私。災害時、白馬村内

ティアクルコーデイネーターの橋之口さん、同じ立場になったら、どの様に対応していたらどうかと自分の胸に問きたくなるほど、橋之口さんの言葉には力があつた。どんなに大変でも、終わらない活動はない。直面する課題を、まず自分の内に持って、正面、課題を受け

入れてほしいとの呼びかけに参加者がうなづく。災害の記憶が薄れてはいけない。村を上げて積極的にボランティア活動に参加してほしいとの呼びかけの声が届くよう何かできないかと真剣に考えている私自身に響く。久しぶりに、魅力

いっぱいの人々にあった。ボランティアの講師としてではない、「人」として素晴らしいと感得た橋之口さん。これからの活躍を期待したい。「復旧工事が進むと、夜は車で通す。駐車場の確保が」の言葉が気になる。これからも

全国から募集するボランティアの受け入れ対策を真剣に考えてほしいと願った日でもあった。(NPO法人信州地域社会フォーラム理事・白馬村森上)